

岩手ゆかりの宰相原敬

に高く評価され、後藤新平とも親交のあった中村天風は、わが国ヨガの先達であり、日露戦争時の経歴から「人斬り天風」と称された。さらに、当時コロナピア大学で医学を修めるなど、並外れた胆力・知力の持ち主だった。

その天風が突如、奔馬性肺結核に見舞われ、治癒を求めて世界を放浪した。風が自ら医学に知見を有し、さらに世界中の医療の権威者にも当たったお

いわての

風

していた時のことだ。

エジプトでヨガの大聖人カリアツパ師と出会った。カリアツパから、病を見抜かれた天風は、すぐる思いで救いを求めた。カリアツパは、天風を受け入れ、拠点であるインドの山奥に連れて行った。天風はすぐにでも治療法を教わるものと思っていたが、いつまでもカリアツパに教

えるそぶりは見られなかつた。業を煮やした天風は、カリアツパに抗議したところ、カリアツパは「水で満杯のコップに、お湯を注ぐとしてもこぼれるだけで、何の意味もない」と、まずは聴き手側に受け入れる姿勢が必要であることを指摘した。

すでに述べたように天風が自ら医学に知見を有し、さらに世界中の医療の権威者にも当たったお

り、それなりに医療知識へのプライドを持っていたことを、カリアツパは見透かしたのだ。

関 洋一 一関市・企業世話人



せき・よついち 52年紫波町生まれ。東京理科大学。商社勤務、誘致企業取締役、県中小企業支援センター・プロジェクトマネジャーなどを経て現在は中小企業大学校・高知工科大学大学院講師、盛岡市創業支援マネジャーなど。

んだ。

二等級は、「聴きすぎる耳」だ。いわゆる付和雷同タイプで、平時には問題ないが、他人任せで優柔不断と軽率さが同居する危うさを持つ。

最悪の三等級は、「上っ面だけの聴く耳」だ。他人の意見など最初から受け入れる気

などさらさら ないのに、殊勝をよそお

謙虚に「聴く耳」大切

ら私が良い知恵を与えても意味がないのだ」と喝破され、天風は目を覚まさせられたという。

これを契機として、積極の精神を伝授された天風は、わずか三年ほどでヨガの極意を体得し、不治と言われた病も完治した。

その後、帰国した天風のもとには、政治家や財界人、さらに宇野千代ら文化人も含めて各界の人物たちが参集し、わが国の思想に大きな影響を与

えることになった。

傑出した人物の天風で

さえ、「聴くこと」にこれだけ難儀したわけだから、多くの企業経営者に「聴けない」傾向が見られるのは当然のことだろう。

しかし、企業経営の成功要素として「聴く耳を持つ」は必須である。なぜなら、事業とは「顧客の声に応えること」そのものだからだ。

企業は経営者次第といわれる通り、経営者に「聴く耳」や聴こうという姿勢がなければ、社員もそれにない、顧客に対する関心を持つことはな

い。万が一顧客本位の優秀な社員がいても、早晩こんなトップに見切りをつけて去っていくのが関の山だ。

この「聴く耳」は、いわゆる「素直さ・謙虚さ」と言い換えられるが、等級があるので要注意だ。

一等級は、「バランス良く聴く耳」で、本物の成功者の多くはこのタイプだ。包容力に裏打ちされ、いったんすべて受け入れてから自分なりに咀嚼して取り入れるパタ

予感がする。

先行き不透明な幕開けをした丑年だが、高村光太郎が「鈍牛の言葉」で「おれはのろまな牛こだが、じりじりまっすべにやるばかりだ」と述べているように、今年も素直で謙虚な「一等級の聴く耳」、すなわち原や後藤が天風から学んだとき本来の分野で求められる

予感がする。

満杯のコップにお湯は注げない